

金沢文庫本『正法眼蔵』の訳注研究（五）

外国語禪籍研究班

小川 隆 池上 光洋
林 鳴 宇 小早川 浩大

目次

凡例

- 〔四六〕（諸本では163）玄沙造無縫塔
〔四八〕（148）雲巖無情說法
〔五〇〕（150）大寂揚眉瞬目
〔五二〕（152）大証指石師子
〔五四〕（154）南泉使得正快
〔五六〕（156）靈雲驢事馬事
- 〔四七〕（147）臨濟無位真人
〔四九〕（149）雪峰一片田地
〔五一〕（金沢文庫本のみ）石霜擬著即差
〔五三〕（153）百靈便戴笠子
〔五五〕（155）靈雲桃花悟道
（※以下〔五七〕～〔六七〕まで欠丁）

凡例

一、本稿は金沢文庫本『正法眼蔵中』四六～五六則の原文・訓読・現代語訳・出典・注釈である。真字『正法眼蔵』(『正法眼蔵三百則』または単に『三百則』とも呼称)には、他に真法寺旧蔵本(黄泉本または伊勢氏旧蔵本とも、現在河村孝道氏所蔵)・永昌院本・成高寺本・松源院本・大安寺本(下巻のみの端本)・拈評三百則本・丈六寺本(上巻のみの端本/拈評本の稿本)の七種の異本が現存するが、本稿は和語化への生々しい痕跡を有する金沢文庫本の忠実な訓読と現代語訳を目的とするため、細かな異本校合は行わなかつた。

一、底本には『永平正法眼蔵蒐書大成 一』(大修館書店一九七八年)所収の金沢文庫本を用いた。金沢文庫本は、句読訓点や唐音読みを残す国語史的にも貴重な資料であるが、底本は『蒐書大成』(影印)や『金沢文庫資料全書』第一巻・禪籍篇(翻刻)(神奈川県立金沢文庫一九七四年)等によつて比較的容易に参照できるため、原文は漢字のみとし、文字も通用の新字体に統一した。また、読解の便宜のため、底本に朱筆で打たれた読点を極力尊重しつつ、あらたに標点を施した。

一、本稿では検索の便を考慮して、各則のはじめに金沢文庫本における通し番号、三百則全体の通し番号、および表題を太字で付した。金沢文庫本の通し番号は、底本中に十則ごとに書かれる通し番号を元にし、「」内に漢数字で表記した。但し、脱丁部分にあたる五七則から六七則、および七六則から八一則は欠番扱いにし、八二則は後半部分が存在するので則数に入れた。三百則全体の通し番号は、石井修道校注『道元禪師全集』五(春秋社一九八九年)所載の通し番号を付し、「」内に算用数字で表記した。表題も同書の目次(凡例所載)を採用した。

一、訓読は、底本の句読訓点を忠実に再現するよう努めた。底本には漢字の左右に振り仮名が振られ、一文に訓読みと音読みを併記する例が存在するが、本稿ではまず右側の振り仮名を基準として訓読文を作成し、左のものは「」に入れてその直後に、右傍訓右のものは(右・)、頭注は(頭・)と表記した。また、底本の振り仮名は全て片仮名で濁音表記は一切無く、促音表記等も不統一であるが、読み易さを考慮して訓読には濁点と必要最小限の振り仮名を追加した。但し、底本の振り仮名と混同しないため、本稿で新たに付加したものは平仮名で表記した。また、古用仮名は一律に現行の片仮名に改めた。不読文字は「」に入れて表記した。

一、現代語訳は、訓読文をもとに訳出したものである。近年、漢語史研究の進展により、従来の禅籍の読み方が再検討されてきているが、本稿では、道元が漢語をどのように理解し、それを和語でどう表現したのか、その過程を明かすことを目的としているため、現在の語学的見地から見てたとえ不適切な読み方であったとしても、敢えて訓読文に忠実な翻訳を試みた。原語の意味と訓読の解釈に相違があると考えた場合は、注にその旨を記した。

一、出典は道元が古則をどう理解し、どう変更を加えたかを明らかにするために付した。但し、出典研究自体は既に行われているため、本稿では細かな考証は行わず、鏡島元隆監修『道元引用語録の研究』（春秋社一九九五年）の成果に従い、第一出典を（A）、第二出典を（B）として表示した。

一、注は本則を読むために必要な情報を載せ、道元禅の思想的展開の上で重要な事項がある場合には、最後に補注を付けた。また、引証に用いた文は、注釈者の解釈を明らかにするため全て書き下しにした。但し、金沢文庫本や祖山本『永平広録』等の古い訓読を残す文を引く場合は、その訓読に従った。その場合は、書き下し文を片仮名で表記して区別した。尚、注番号は原文中に付した。本稿の目的からすると訓読文中に付すべきであるが、訓読文には多数の振り仮名などが付されているため、いたずらな混乱を避ける処置である。

一、本稿で引用する主な文献は、以下のものを用いた。出典や注においてそれらのものを使用した場合は、書名・巻数・頁数のみを記した。但し、灯史類を使用した場合は、巻数の次に祖師名を明記した。引用が数頁にわたる場合は、その先頭の頁数を表記した。

真字『正法眼蔵』（石井修道校注『道元禅師全集』五・春秋社一九八九年）は、則数のみを表記し、頁数等は省略した。

仮字『正法眼蔵』（水野弥穂子校注・岩波文庫一九九〇年）は、『正法眼蔵』「観音」巻と表記し、（ ）内に巻数と頁数を表記した。尚、岩波文庫本に不載の巻は河村孝道校注『道元禅師全集』二（春秋社一九九三年）を用い、（全集二・〇〇頁）と表記した。

『永平広録』（渡部・大谷監修『永平広録考注集成・祖山本』一穂社一九九八年）

『正法眼蔵随聞記』（東隆真編『五写本影印・正法眼蔵随聞記』圭文社一九八〇年）

その他の道元の著作は春秋社の『道元禅師全集』によった

金沢文庫本『正法眼蔵』の訳注研究(五)(小川 池上 林 小早川)

六〇

『大正新修大蔵経』は大正〇〇・〇〇〇a、『中統蔵経』は統蔵〇〇・〇〇〇dと表記した。

『祖堂集』(基本典籍叢刊・禅文化研究所一九九四年)

『景德伝灯録』(基本典籍叢刊・禅文化研究所一九九〇年)

『宗門統要集』(柳田・椎名編・禅学典籍叢刊一・臨川書店一九九九年)

『天聖広灯録』(柳田聖山編・禅学叢書五・中文出版社一九七五年)

『聯灯会要』(統蔵一三六)

『嘉泰普燈録』(統蔵一三七)

『建中靖国統灯録』(統蔵一三六)

『臨濟録』(入矢義高訳注・岩波文庫一九八九年)

『趙州録』(秋月龍珉訳注・禅の語録一・筑摩書房一九七二年)

『洞山録』(柳田聖山編・禅学叢書三『四家語録・五家語録』中文出版社一九八三年)

『曹山録』(柳田聖山編・禅学叢書三『四家語録・五家語録』中文出版社一九八三年)

『仰山録』(柳田聖山編・禅学叢書三『四家語録・五家語録』中文出版社一九八三年)

『宏智録』(石井編・禅籍善本古注集成・名著普及会一九八四年)

『明覚録』(柳田・椎名編・禅学典籍叢刊二・臨川書店一九九九年)

『雪竇頌古』(入矢他訳注・禅の語録一五・筑摩書房一九八一年)

『圓悟録』(大正四七)

『碧巖録』(入矢・溝口他訳注・岩波文庫一九九二年)

『大慧録』(大正四七)

大慧『正法眼蔵』(柳田・椎名編・禅学典籍叢刊四・二〇〇〇年)

『從容録』(基本典籍叢刊・禅文化研究所一九九四年)

『如浄録』(大正四八)

『禪門諸祖師偈頌』（続藏一一六）

『禪門拈頌集』（柳田・椎名編・禪學典籍叢刊七・臨川書店一九九九年）

太田辰夫「『祖堂集』語法概説」（『中国語史通考』白帝社一九八八年）

一、各則の担当者名は最後に記した。

一、本稿は駒澤大学禪研究所外国語禪籍研究班の活動報告として発表するものである。

訳注

〔四六〕（諸本では163）玄沙造無縫塔

玄沙因待雪峰^①、遊山次、峰云：「欲將此一片地作長生地。」師云：「看此一片地，好造箇無縫塔。」峰乃作量勢。師云：「是即是，某甲不与麼。」峰云：「汝，作麼生。」師云：「造塔。」峰云：「好々。」

〈書き下し〉

玄沙因ニ雪峰ニ待シテ、遊山スル次ニ、峰云ク、「將ニ此ノ一片ノ地ニ長生地ヲ作ラムト欲フ。」師云ク、「此ノ一片地ヲ看ルニ、箇無縫塔ヲ造ラム（造ラムハ）好シ。」峰乃チ量勢ヲ作す。師云ク、「是ハ即チ是ナリ、某甲与麼なら不（不与麼）。」峰云ク、「汝、作麼生。」師云ク、「造塔。」峰云ク、「好々。」

〈現代語訳〉

玄沙が師の雪峰の供をして遊山していたおり、雪峰が言った、「いつかここをわが永眠の地としたいものだ。」玄沙、「ええ、見たところ、無縫塔を造るのに恰好の地のようでございます。」雪峰はそこで寸法を量るかつこうをした。玄沙、「それはそれでよろしいのですが、それがしならば、そのようには致しませぬ。」雪峰、「では、おぬしならどうする。」玄沙、「塔を建てます。」雪峰、「うむ、うむ。」

〈出典〉

(A) 『統要集』卷九（二九八頁a）

金沢文庫本『正法眼蔵』の訳注研究（五）（小川 池上 林 小早川）

(B) 『伝灯録』巻一八(三三三頁b)

大慧 『眼藏』巻上(四一頁b)

『会要』巻二三(統藏一三六・四〇九頁d)

(注)

①玄砂 〓玄沙師備。一〇九則注①参照。本則は『玄沙広録』(統藏二二六・一七七頁d/禪文化研究所訳注本上・四〇頁)にも収録されている。

②雪峰 〓雪峰義存。一〇九則注②参照。

③欲將此一片地作長生地 〓長生地は墓地の婉曲表現、墓塔を寿塔というのと同じ(寿は長寿の意)。「將」は、一〇四則で「將一炬火提起」が「一炬ノ火ヲ將テ提起シテ」と訓まれていたように、処置の対象を述語の前に引き出す介詞、「を」を、「を」ば(現代漢語の「把」に当たる)。よって、この一句は本来、「此の一片地を將て長生地と作さんと欲す」と訓むべきもの。

④無縫塔 〓南陽慧忠の次の問答を踏まえる。『祖堂集』巻三・慧忠国師章、「代宗皇帝問う、師の百年の後は、今の什摩をか要す。師曰く、老僧が与に今の無縫塔を造れ。帝乃ち胡跪して曰く、師の塔様を請う。師良久す、帝措くこと固し。師曰く、吾に付法の弟子有りて耽源に在り、却って此の事を諳れば、他に問取し去れ。国師の順世の後、帝乃ち耽源に詔して此の因縁を挙して問う、此の意如何。耽源乃ち偈を作りて曰く、湘の南、潭の北、中に黄金の一国に充つる有り。無影樹下の合同船、琉璃殿上に知識無し」(二二七頁)。これによれば、「無縫塔」とは、如何なる形状も位置も持たぬ無相の塔という意。

⑤峰乃作量勢 〓「作」勢は、のさまをなす、の動作をして見せる。一八七則、「師、手ヲ以テ餠餅ヲ拈起スル勢ヲ作シテ云ク」。一九七則、「師、来ヲ見テ便チ倒シテ睡勢ヲ作ス」。ここで雪峰がなにも無いところで寸法を量るしぐさをして見せたのは、おそらく、無相なる虚空がそのまま我が「無縫塔」だという意を示したものの。

⑥是即是、某甲不与麼 〓師の見処を婉曲に否定したもの。「即」は、「くなくことは確かにくだが、しかし」と、ひとまず肯定しておいて、後に否定に転ずる語法。一四九則、「是なるコトハ即ち是ナリ、某甲シ不慙麼」。前半の強い確認・肯定は、後半で反転するための準備となる。「たしかにくだが、しかし」…。入矢義高「中国口語史の構想」参照(空花集二二五頁)。

⑦造塔 〓「私なら塔を建てます」。素直にふつうの塔を建てればよいだけのこと。師は虚空の上にことさら「無相」という型

をはめてしまつておられます。『碧巖録』一八則本則評唱で圓悟が慧忠の「無縫塔」を次のように評しているのを参照。「この老漢風無きに浪を起して却て道う、老僧が与めに箇の無縫塔を造れと。且く道え、白日青天なるに此の如くにして什麼をか作さん。箇の塔を做らば便ち了らん。為什麼にか却て道う、箇の無縫塔を做れと」(上・二四二頁)。

《補注①》

諸本では一四六則に「六祖仁者心動」を録し、金沢文庫本はそれを八二則に録す(ただし前半欠丁)。本則「玄沙造無縫塔」は、諸本では一六三則に録されるが、金沢文庫本では六三則が欠丁となっており、そこに何の問答が収められていたかは不明。

《補注②》

六〇則も本則と同旨。

玄沙、因みに雪峰に侍し行く次で、峰は面前の地を指して云く、「這の一片の田地、箇の無縫塔を造るに好し。」師曰く、「高さこと多少ぞ。」峰乃ち上下を顧視す。師曰く、「人天の福報は、即ち無きにあらざるも、和尚、靈山の授記は、未だ夢にも見ざる在。」峰云く、「你、作麼生。」師曰く、「七尺八尺。」(禪文化研究所訳注本『玄沙広録』巻下・補遺〔六〕、一七一頁、参照)。

また、『祖堂集』巻一一・睡龍章には次の問答もある。

因みに雪峰、玄沙に問う、「汝は還た国師の無縫塔を識るや。」玄沙却つて問う、「無縫塔は闊は多少、高さは多少ぞ。」雪峰、顧示す。玄沙云く、「和尚何ぞ自ら犯すを得ん。」僧、師に問う、「玄沙は豈に是れ雪峰を諾せざるにあらざるや。」師云く、「是なり。」僧云く、「既然に此の如くなれば、師に請う、雪峰に代わつて玄沙に対えんことを。」師云く、「向後修造するを用いざれ。」(四四三頁／禪文化研究所訳注本『玄沙広録』巻下・補遺〔五〕、一六九頁、参照)。

《補注③》

本則は仮字『正法眼蔵』に引かれませんが、右の六〇則が「授記」の巻に取り上げられている。

〔四七〕(147) 臨濟無位真人

臨濟慧照大師、示衆云：「有一無位真人，常在汝等面門出入。初心未証拠者，看々！」
(書き下し)

臨濟(リムシイ) 慧照大師、衆ニ示して云く、「一ノ無位ノ真人有り、常ニ汝等ナムダチ方面門ニ在テ出入ス。初心未証コヒトノ者、看ルベシミ看ルベシ。」

〔現代語訳〕

臨濟慧照大師が大眾に示して言われた、「ひとりの無位の真人があつて、常におぬしらの六根を出入りしている。いまだそれを確かめていない初心の者は、さあ看よ！ 看よ！」

〔出典〕

(A) 『宏智録』 卷二・頌古三八(九六頁)

『明覺録』 卷一・拳古二(九頁^a)

(B) 『広灯録』 卷一〇(統藏一三五・三四三頁^c)

『伝灯録』 卷一二(二〇九頁／禪文化研究所訓注本四・三四七頁)

『会要』 卷九(統藏一三六・二八九頁^b)

『碧巖録』 三三則本則評唱(中・二七頁／一夜本に無し)・七三則頌古評唱(下・二七頁／一夜本に無し)

『臨濟録』 上堂三(二〇頁)

〔注〕

① 臨濟慧照大師 臨濟義玄(？)八六六または八六七。黄檗希運の法嗣。慧照大師はその諡号。『宋高僧伝』卷一二に立伝され、『臨濟録』の他、『祖堂集』卷一九、『伝灯録』卷一二、卷二八等に語を録す。「無位真人」の一段はそれらのいづれにも見えるが、ここはその冒頭の一句のみをとりあげたもの。以下の注解にあたっては、禪文化研究所訓注本『景德伝灯録』卷四(三四七頁)を参照した。

② 有一無位真人 真人はもと道家の語で、道とともにある者。『莊子』大宗師篇、「且かつ真人有りて而る後に真知有り。何をか真人と謂う。古えの真人、寡すくなきにも逆らわず、成れども雄ひさらず、士を慕ほめらず。然かくの若ごとき者は、過あやまりても悔ないず、当あたれども自得じとくせざるなり也。然かくの若ごとき者は、高たかきに登るも慄おそれず、水に入るも濡ぬれず、火に入るも熱あつからず。是れ知の能よく道みちに登のぼるや、此こくの若ごとし」(郭慶藩『莊子集釈』、中華書局、新編諸子集成本、二二六頁)。初期の漢訳仏典で「阿羅漢」の訳語に用いられ

たこともある。詳しくは吉川忠夫「真人と聖人」(岩波講座・東洋思想14「中国宗教思想2」一九九〇年)参照。出典B群などではこれを「五陰(蘊)身中、有一無位真人……」(『宗鏡錄』卷九八・『祖堂集』卷一九・『伝灯録』卷二八)、または「赤肉団上、有一無位真人……」(『臨濟錄』・『伝灯録』卷二二)に作る(ただし『伝灯録』も四部叢刊本では「赤肉団上」を「肉団心上」に作る)。詳しくは補注②・小川「無位真人」参照。

③常在汝等面門出入〓「面門」は口を指すこともあるが、ここでは六根の意。「常在汝等面門出入」は、六根の感覚が常にはたらいっていることの比喩(無著道忠『臨濟錄疏論』/柳田聖山主編・禅学叢書10『臨濟錄抄書集成』下、中文出版社一九八〇年、二二七〇頁)。また、傅大士『心王銘』、「心王も亦た爾り、身内に居し停まり、面門より出入し、物に応じ情に随う」(『伝灯録』卷三〇・六一五頁b)。ほかに「面門」で顔面を表す用法もある。『普灯録』卷二七・法昌遇「風幡」頌、「黒花の猫子、面門斑なり」(続蔵一三七・一九〇頁b)。

④初心未証拠者〓証拠は確かめる意の動詞。「初心」の語は『宏智録』と『明覚録』のみに見える。

⑤看々〓『宏智録』や『明覚録』では以下の一文が続くが、本則では省略されている。「時に僧有りて問う、如何なるか是れ無位の真人。際(臨濟)、禅床を下りて擒住す。者の僧、議せんと擬するや、際、托開して云く、無位の真人、是れ什麼たる乾屎橛ぞ!」。

〔補注①〕

道元の他の著述に、本則全体の引用は見られない。語句については、以下のように仮字『正法眼蔵』中に三箇所用例が見られる。「有時」の引用は、本書と同じ本文に拠っていることをうかがわせる。

〔空華〕卷

「自」は己なり、己は必定これ你なり、四大五蘊をいふ。使得無位真人のゆゑに、われにあらず、たれにあらず。このゆゑに不必なるを「自」といふなり。(一・二六六頁)

〔説心説性〕卷

臨濟の道取する尽力はわづかに無位真人なりといへども、有位真人をいまだ道取せず。のこれる参学、のこれる道取、いまだ現成せず、未到参徹地といふべし。説心説性は説仏説祖なるがゆゑに、耳処に相見し、眼処に相見すべし。(二・四二八頁)

「有時」卷

いまの凡夫の見、および見の因縁、これ凡夫のみるところなりといへども、凡夫の法にあらざり、法しばらく凡夫を因縁せるのみなり。この時、この有は、法にあらざりと學するがゆゑに、丈六金身はわれにあらざりと認するなり。われを丈六金身にあらざるとのがれんとする、またすなはち有時の片々なり、未証、抛者の看々なり。(二・五一頁)

〔補注②〕

「臨濟無位真人」に關しては、入矢義高「臨濟録・解説」(『臨濟録』岩波書店一九八九年)・「玄沙の臨濟批判」(『空花集』思文閣出版一九九二年)、松本史朗「臨濟の基本思想について」(『禪思想の批判的研究』大藏出版一九九四年)、小川隆「語録のことば23・24—無位真人(上・下)—」(『傘松』七三七・七三八、大本山永平寺二〇〇五年二月・三月)等を参照。また、石井修道「中国禪宗史話」は、道元の臨濟批判や自然外道批判から考えると、本則は批判的に參究されるべきものであると説く(『禪文化研究所一九八八年、四四五頁)。

〔四八〕(148) 雲巖無情說法

洞山悟本大師、參雲岩問：「無情說法、什麼人得聞？」岩云：「無情說法、無情得聞。」師云：「和尚聞否？」岩云：「我若得聞、汝即不聞吾說法也。」師云：「若恁麼即某甲不聞和尚說法也。」岩云：「我說汝尚不聞、何況無情說法也。」師乃述偈呈雲岩曰：「也大奇、也大奇。無情說法不思議。若將耳聽聲不現、眼処聞聲方得知。」
(書き下し)

洞山悟本大師(悟本大師)、雲岩ニ參ジテ問フ、「無情ノ說法、什麼人カ聞くコトヲ得ル。」岩云く、「無情ノ說法、無情聞くコトヲ得。」師云く、「和尚聞くヤ否ヤ。」岩云く、「我レ若シ聞くコトヲ得バ、汝即ハチ吾ガ說法ヲ聞カ不(也)。」師云く、「若シ恁麼ナラバ即チ某甲和尚ノ說法ヲ聞カ不(也)。」岩云く、「我が説、汝尚ホ聞カ不、何ニ況んヤ無情ノ說法ヲヤ(也)。」師乃ハチ偈ヲ述シテ雲岩ニ呈シテ(呈スルニ)曰ク、「也タ大奇ナリ(也大奇)、也太奇。無情說法不思議ナリ。若シ耳ヲ將テ聽ケバ声現レ不(不現ナリ)、眼処ニ声ヲ聞ク(聞聲シテ)方ニ知ルコトヲ得。」

〔現代語訳〕

洞山悟本大師が雲巖和尚に参じて問うた。「無情說法」はどのような人が聞けるのでしょうか？」雲巖、「無情說法」は無情が聞き得るのだ。」洞山、「和尚さまには聞こえますか？」雲巖、「私にそれが聞こえたら、お前には私の説法が聞こえぬことになる。」洞山、「それならば、それがしは、和尚さまの説法を聞かぬことにいたします。」雲巖、「私の説法すら聞こえぬなら、無情説法はなおさらだ。」洞山はそこで偈を記して雲巖に差し出した。

素晴らしや 素晴らしや

無情説法は思議を入れぬもの

耳に聞こうとしてもその声は聞こえない

眼にその声を聞いてこそ それを知ることができるのだ

〈出典〉

(A) 『伝灯録』卷一五(二九七頁a)

(B) 大慧『眼蔵』卷中(六五頁a)

『洞山録』(二二四頁b)

〈注〉

① 洞山悟本大師 洞山良价(八〇七〜八六九)。雲巖曇晟の法嗣。悟本大師は諡号。『宋高僧伝』卷二に立伝され、『伝灯録』卷一五等に語を録す。左傍訓「キム」ほどの文字に対するものかよくわからない。「悟」は二四則、三九則に「コ」、「本」には二五則に「フム」の振り仮名が見える。

② 雲岩 雲巖曇晟(七八二〜八四二)。一〇五則に既出。

③ 無情説法、什麼人得聞 無生物の説く法はどんな人が聞けるのか。「無情説法」は、生命なき草木や山川にも仏性があるという無情仏性説から展開したもので、無情は間断なく法を説いているとした南陽慧忠(？〜七七五)の説がよく知られる。『伝灯録』卷二八、「禅客曰く、無情既に心有るに、還た解く説法する也無。師曰く、他れ熾然に説き、恆に説き常に説き、間歇有ること無し」(補注①参照)。詳しくは村上俊『唐代禅思想の研究』第三部第一章七「南陽慧忠の禅思想」(花園大学国際禅学研究所『研究報告』第四冊一九九六年・四九六頁、斎藤智寛「唐・五代宋初の禅思想における無情仏性・説法説」(『集刊東洋学』八一・一九九

九年)を参照。なお、洞山は先に瀉山靈祐(七七一〜八五三)に南陽慧忠の「無情說法」のことを問うており、それによって雲巖に参じるよう勧められている。『伝灯録』卷一五・洞山良价章、「次に瀉山に参じて問うて曰く、頃、忠国師に無情說法有りと聞く、良价未だ其の微を究めず。瀉山曰く、我が這裏にも亦た有り、只是其の人を得難きのみ。曰く、便ち請う、師の道わんことを。瀉山曰く、父母所生の口、終に敢えて道わず。曰く、還た師と同時に道を慕う者有る否。瀉山曰く、此を去りて石室相連ぬるに、雲巖道人なる有り。若し能く撥草瞻風せば、必ずや子の重んずる所と為らん」(二九六頁)。

④無情說法、無情得聞。無情の説く法は、無情にこそ聞こえる。すなわち、無情にしか聞こえない。

⑤我若得聞、汝即不聞吾說法也。無情說法とは言語によつて分節される以前の世界の真相。いわばすべての事物がただ事物のままにあることが無情說法なのであつて、それが識別され言語に置き換えられたなら、それはもはや有情說法に転落してしまふ。したがつて無情說法を聞くとは、自らもその無情の一部となることであつて、それは有情說法―概念・言語―との絶縁を意味する。補注①に引く『祖堂集』南陽慧忠章の末尾にいわく、「頼に我れ無情說法を聞かず。我れ若し無情說法を聞かば、我れ則ち諸聖に同じ。汝若為が我れを見、及び我が說法を聞くを得んや」。また、『祖堂集』卷一七・長沙景岑章、「問う、如何なるか是れ無情說法。師、東辺の露柱を指して云く、這箇の師僧、説き得る。僧云く、什摩人か聞くことを得る。師、西辺の露柱を指して云く、這箇の師僧、聞くことを得る。僧云く、師、還た聞く摩。師云く、我れ若し聞かば則ち誰をしてか拏せしめん」(六四二頁)を参照。

⑥若恁麼即某甲不聞和尚說法也。それならば、私は和尚の說法などを聞かず、直接に無情說法を聞くことに致します。

⑦我説汝尚不聞、何況無情說法也。有情說法を否定して無情說法を聞く、というのもまた一種の分別である。有情と無情との分別の無いところに身を置けつてという示唆。

⑧也大奇。なんとすばらしきことか。「也」は感嘆の語。『祖堂集』では「可笑奇、可笑奇」(二九三頁)に作る。一五六則、「稜(長慶慧稜)是ノ如クシテ雪峰・玄砂ニ往來スルコト、二十年ノ間ナリ、此ノ事ヲ明メ不。一日簾ヲ卷起スルニ、忽然とシテ大悟ス。乃チ頌ヲ有ツテ曰ク、也大奇、也大奇。卷起簾來シテ天下ヲ見ル。人有テ我レニ問ハム何ノ宗ヲカ解セルト、私子ヲ拈起シテ劈口ニ打タム」。

⑨無情說法不思議。「儀」は「議」の誤り。無情說法とは言語化しえぬ不可思議なものだ。『祖堂集』、東禪寺版『伝灯録』で

は「無情解く不思議を説く」に作る。

⑩若將耳聽声不現、眼処聞声方得知。耳で聴くとは言語を通して聴くこと。しかし、無情説法は言語を介しては聞き得ない。世界の相をありありと、ただ如実に見ることこそが真に無情説法を聞くことなのだ。

《補注①》

南陽慧忠の「無情説法」の話については次のようにある。

『伝灯録』卷五・光宅慧忠章

南陽張漬行者問う、「伏して承わるに和尚、無情説法を説くと。某甲未だ其の事を体せず。和尚の垂示を乞う」。師曰く、「汝若し無情説法を問わば、他の無情を解して方めて我が説法を聞くを得ん。汝但だ無情説法を聞取し去れ」。漬曰く、「只だ如今の有情方便の中に約さば、如何なるか是れ無情の因縁。師曰く、「如今の一切の動用の中、但そ凡聖の両流都て少分の起滅無く、便ち是れ識を出でて有無に属せず。熾然に見覺して只だその情識の繫執無きを聞くのみ。所以に六祖云く、六根、境に對し、分別するも識に非ず」と。(八五頁)

『祖堂集』卷三・南陽慧忠章

南方の禪客有りて問う、「如何なるか是れ古仏心」。師曰く、「牆壁瓦礫、無情の物、並べて是れ古仏心」。禪客曰く、「經と太だ相違す。故に涅槃經に曰く、牆壁瓦礫、無情の物を離れるが故に仏性と名づく」と。今、一切無情皆な是れ仏心なりと云う。未審心と性と為た別なるか別ならざるか」。師曰く、「迷人には即ち別、悟人には即ち不別なり」。禪客曰く、「又た經と相違す。故に經に曰く、善男子、心は仏性に非ず。仏性は是れ常なり、心は是れ無常なり。今日、不別とす。未審此の義如何」。師曰く、「汝語に依りて義に依らず。譬えば寒月に水を結んで氷と為り、暖時に至るに及んで氷釈けて水と為るが如し。衆生迷う時は性結はれて心と成り、衆生悟れる時は心釈けて性と成る。汝若し定んで無情無仏性に執わるれば、經に、三界唯心、万法為識と言う応からず。故に華嚴經に曰く、三界の所有の法は一切唯だ心の造れるのみなり。今且らく汝に問う、無情の物、為た三界に在りや、為た三界の外に在りや。為復た是れ心なるか、為復た是れ心ならざるか。若し心に非ざれば、經に、三界唯心」と言う応からず。若し是れ心なれば、無情無仏性」と言う応からず。汝自ら經に違ふも、吾れは違わざる也」。禪客曰く、「無情既に心有れば、還た解く説法する也無」。師曰く、「他れ熾然に説き、恆に説き常に説きて、聞歌有ること無し」。禪客曰く、「某甲為什摩にか聞こえざるや」。師曰く、「汝自ら聞かざるも、他の聞く者有るを妨ぐ可からず。進みて曰く、「誰人か聞くを得る」。師曰く、「諸聖聞くを得」。禪客曰く、「与摩なれば即ち衆生心に分無かるべし」。師曰く、「我れ衆生の為に説く、

他の諸聖の為に説く可からず。」禪客曰く、「某甲、愚昧声響にして無情説法を聞かず、和尚是れ人天の師と為りて、般若波羅蜜多経を説く、無情説法を聞き得る不。」師曰く、「我にも亦た聞こえず。」進みて曰く、「和尚為什摩にか聞こえざる。」師曰く、「頼に我れ無情説法を聞かず。我れ若し無情説法を聞かば、我れ則ち諸聖に同じ。汝若為が我れを見、及び我が説法を聞くを得んや。」禪客曰く、「一切衆生、畢竟還た無情説法を聞くを得る不。」師曰く、「衆生若し聞かば、即ち衆生に非ず。」(一一九頁)

〔補注②〕

本則は『正法眼藏』『無情説法』巻、『永平広録』巻六・上堂四五二、巻九・頌古五二に取り上げられる。なお、『無情説法』巻、『永平広録』巻六では、本則の「若将耳聴声不現」を「若将耳聴終難会」に作る。

〔無情説法〕巻

高祖洞山悟本大師、參巽祖雲巖和尚問云、「無情説法什麼人得聞。雲巖巽祖曰、「無情説法、無情得聞。高祖曰、「和尚聞否」。巽祖曰、「我若聞、汝即不得聞吾説法也」。高祖曰、「若恁麼、即某甲不聞和尚説法也」。巽祖曰、「我說汝尚不聞、何況無情説法也」。高祖乃述偈呈巽祖曰、「也太奇、也太奇、無情説法不思議。若将耳聴終難会、眼処聞声方得知」。

いま高祖道の「無情説法什麼人得聞」の道理、よく一生多生の功夫を審細にすべし。いはゆるこの問著、さらに道著の功德を具すべし。この道著の皮肉骨髓あり、以心伝心のみにあらず。以心伝心は初心晩学の弁肯なり。衣を拏して正伝し、法を拏じて正伝する関楸子あり。いまの人、いかでか三秋四月の功夫に究竟することあらん。高祖かつて大証道の「無情説法諸聖得聞」の宗旨を見聞せりといへども、いまさらに「無情説法什麼人得聞」の問著あり。これ肯大証道なりとやせん、不肯大証道なりとやせん。問著なりとやせん、道著なりとやせん。もし総不肯大証、争得恁麼道、もし総肯大証、争解恁麼道なり。(三・六一頁)

〔永平広録〕巻六・上堂四五二

洞山初メテ雲巖ニ參ジテ問ふ、「無情説法什麼人得聞。」雲巖云ク、「無情説法、無情得聞。」洞山云ク、「和尚還タ聞ク否。」雲巖云ク、「我レ若シ聞クコトヲ得バ、汝ヂ吾ガ説法ヲ聞カ不也。」洞山云ク、「恁麼ナラバ則チ某甲和尚ノ説法ヲ聞カ不也。」雲巖云ク、「我が説法汝チ尚聞カ不、何ニ況ヤ無情説法ヲヤ也。」遂ニ偈ヲ呈シテ曰ク、「也太奇、也太奇。無情説法不思議。若将耳聴終難会。眼処聞声方得知。」(下・六〇頁)

〔永平広録〕巻九・頌古五二

洞山、雲岩ニ參ジテ問フ、「無情說法、什麼人カ聞クコトヲ得ル。」巖云ク、「無情說法、無情聞クコトヲ得。」山曰ク、「和尚聞クヤ否ヤ。」岩云ク、「我レ若シ聞クコトヲ得バ、汝チ即チ吾ガ說法ヲ聞カ不也。」山曰ク、「若シ恁麼ナラバ、即チ某甲シ和尚ノ說法ヲ聞カ不也。」岩曰ク、「我ガ説、汝チ尚聞カ不、何ニ況ヤ無情說法ヲヤ也。」山乃チ偈ヲ述シテ雲岩ニ呈シテ曰ク、「也大奇、也大奇。無情說法不思議。若將耳聽声不現、眼処聞声方得知。」

無情說法無情会ス、牆壁、草木ヲ教テ春ナラシムルコト莫レ、凡聖含靈己分ニ非ズ、山河日月及ビ星辰。(下・三二四頁)

〔四九〕(149) 雪峰一片田地

雪峰山真覺大師、一日示衆云：「此事如一片田地相似、一任衆人耕種、無有不承此恩力者。」時玄砂云：「且作麼生是一片田地？」師云：「看！」砂云：「是即是、某甲不恁麼。」師云：「你作麼生？」砂云：「只是人々底。」

〔書き下し〕

雪峰山真覺大師、一日衆ニ示シテ云ク、「此ノ事一片ノ田地ノ如クニ相似タリ、衆人ノ耕種ニ(耕種スルコトヲ)一任ス、此ノ恩力ヲ承ケ不ル者有コト無シ。」時ニ玄砂云ク、「且ラク作麼生是一片田地。」師云ク、「看。」砂云ク、「是なるコトハ即チ是ナリ、某甲シ不恁麼。」師云ク、「你チ作麼生。」砂云ク、「只タ是レ人々底。」

〔現代語訳〕

雪峰山の真覺大師が、ある日、大衆に示してこう言われた、「此の事は、一面の田のようなもの、皆はこれを耕し放題で、その恩恵を蒙らぬ者はない」と。ここで玄沙、「その一面の田とは如何なるものでございませうか」。雪峰、「看よ！」玄沙、「それはそれでよろしいのですが、私ならばそのようには致しませぬ」。雪峰、「では、おぬしならどうなのだ」。玄沙、「ただ、それぞれ自身のことにはすぎませぬ」。

〔出典〕

(A) 『統要集』卷八(一八三頁a)

(B) 『会要』卷二一(続藏一三六・三九三頁a)

〔注〕

①雪峰山真覺大師〓雪峰義存。一〇九則、一三九則、一四四則、金沢文庫本四〇則、金沢文庫本四六則に既出。真覺大師は、唐懿宗から授けられた大師号（『宋高僧伝』巻二、『伝灯録』巻一六など）。本則は『玄沙広録』（続藏二二六・一八六頁c／禪文化研究所訳注本中・四四頁）にも収録されている。

②此事如一片田地相似〓前に指すところなく用いられる「此の事」は、自明の事でありながら言葉で称することの憚かられる禪の第一義を、間接的に示唆する語。『伝灯録』巻七・三角山総印章、「師、上堂す。曰く、若し此の事を論ずれば、眉毛を眨上するも、早已に蹉過えり。麻谷、便ち問う、眉毛を眨上するは即ち問わず、如何なるか是れ此の事。師曰く、蹉過えり」（二〇三頁b／禪文化研究所訳注本三・二頁）。『碧巖録』九則本則評唱、「其の美、此の事は言句の上に在らず。所以に雲門道く、此の事若し言句の上に在らば、三乘十二分教、豈に是れ言句無からんや、何ぞ達磨の西来を須いん」（上・二四四頁）。「一片田地」は一面の田畑。ここでははてしなく広がり、限りなく諸法を生み出す、全一普遍の本来性の喩え。「一片」は広い面積を持つものを数える数量詞。

③一任衆人耕種、無有不承此恩力者〓「一片田地」は隠れもなく、諸君の眼前に全現している。いくらでも好きなだけ、それを享受するがよい。

④玄砂〓玄沙師備。一〇九則に既出。

⑤看〓看よ、眼前に隠れもなく現成しておるではないか！

⑥是即是、某甲不恁麼〓師の見処を婉曲に否定した。一四六則注⑥参照。

⑦只是人々底〓「一片田地」は諸人の面前に広がる一般的なものではない。各人が個々の身の上に自ら具足し自ら受用するものだ。玄沙には次のような問答もある。「勁頭陀問う、雪峰和尚の我が者の一片の田地は、一切の衆生皆な此の恩力を承くと道えるが只如きは、知らず、雪峰の意作麼生。師云く、我れ汝に向かつて道わん、一片の田地の如きに相い似たり。將つて人に売与して契書を作り、東西四至、交関約定し了れるも、只有中心の樹子のみ猶お売らず。你且く作麼生。勁便ち問う、如何なるか是れ一株の樹。師云く、你は我を知らず、我れは你を知らず。云く、如何にせば即ち是き。師云く、分明に汝に向かつて道う、各自相い知らずと。云く、未審し什麼をか知らざる。師云く、什麼を知らざるかを知らず」（『玄沙広録』巻中、続藏二二六・一八九頁d／禪文化研究所訳注本中・一二六頁）。ここにいう「中心の樹子」は、他者と授受することの不可能な自己本分

事の喩えであり、それゆえ、我が本分事を汝は知らず、汝が本分事を我は知らぬ（「你不知我、我不知你」とされるのである。「祖堂集」巻一八・趙州章の次の問答をあわせ看よ。「問う、如何なるか是れ本分事。師、学人を指して云く、是れ你的本分事。僧云く、如何なるか是れ和尚の本分事。師云く、是れ我の本分事」）（六五九頁）。

《補注①》

「一片田地」について、無著道忠の『虚堂録犁耕』は「本分田地也」と注して、五祖法演と白雲守端の次の問答を引く。

一日、南泉の摩尼珠の語を請問す。端之れを叱る。師領悟し、汗下りて体を被う。投機の頌を作りて云く、「山前一片の閑田地、叉手し丁寧して祖翁に問う。幾度売り来たりて還た自ら買える。松竹の清風を引くを憐しむが為めに。」端首めて之を肯う。（『会要』巻一六、続藏一三六・三四二頁c / 『犁耕』禅文化研究所基本典籍叢刊本・一三〇頁a）
また、圓悟にも次の語がある。

若し是れ得底の人なれば、終いに我知我会と言わず。飯に遇えば飯を喫し、茶に遇えば茶を喫して、終日、只守閑閑地なるのみ。蓋し他の胸中に許多の波吒計校無ければなり。所以に道く、心若し無事なれば、万法一如なり。得無く失無く、終日、只だ此の一片田地を履踐し、凡そ来問有れば、只だ此の事を將つて一時に截断するのみ。（『圓悟録』巻二三、大正四七・七七三頁a）

《補注②》

仮字『正法眼蔵』には、本則の引用はない。『永平広録』巻八・法語一一には、「一片田地」について次のように示す。

大師釈尊ノ正法眼蔵、西天東地、分付シ来るコト多時ナリ也。界畔離ら不ルコト在リ。所謂ル分付シ来ル多時トイフ者、這一片ノ田地ナリ也。這一片ノ田地トイウ者、吾等方直下之田地ナリ也。古人之ヲ大道ト称スル者歟。既ニ多時ト云ノ、算数スルコト能ハ不、籌量ス可ラ不。事ト旧時遙ニシテ、四至界畔、曉ラセ不ト雖モ、住持理就シテ（理リ就ッテ）保任日新ナリ。（下・二四八頁）

〔五〇〕（150）大寂揚眉瞬目

①江西大寂禅师示薬山云：「我有時教伊揚眉瞬目，有時不教伊揚眉瞬目。有時教伊揚眉瞬目者是，有時教伊揚眉瞬目者不是。」
②薬山忽然大悟。
③（書き下し）

江西大寂(寂)禪師、葉山ニ示シテ云く、「我レ有ル時ハ伊ヲ教テ揚眉瞬目セシム、有ル時ハ伊を教テ揚眉瞬目セシめ不。有ル時ハ伊を教テ揚眉瞬目せしむ者は是ナリ、有る時ハ伊を教テ揚眉瞬目せしむ者不是ナリ。」葉山忽然トシテ大悟ス。
〔現代語訳〕

江西大寂禪師が葉山惟儼に示して言った、「わたしはある時にはかれに揚眉瞬目させ、ある時にはかれに揚眉瞬目させない。またある時にはかれに揚眉瞬目させる者は正しく、ある時にはかれに揚眉瞬目させる者は正しくない。」葉山は突如大悟した。
〔出典〕

〔B〕『会要』卷一九(統藏一三六・三六九頁d)

『普灯録』卷二三(統藏一三七・一六一頁d)

『統要集』卷七(二四一頁a)

『圓悟録』卷一三(大正四七・七七二頁a)

大慧『眼藏』卷中(六九頁b)

『大慧録』卷二二(大正四七・九〇四頁a)

〔注〕

①江西大寂禪師＝馬祖道一。一〇八則に既出。大寂禪師は馬祖の諡号。本則は右出典群の「大寂揚眉瞬目」の一段から一部のみを抜き出したもの(補注①参照)。その一段は宋代の文献に到ってはじめて現れるもので、ここでは葉山がまず石頭に参じその指示によってさらに馬祖に参じたとされているが、おそらく宋代における創作である。『馬祖の語録』(「三七」)葉山、石頭・馬祖に参ず(『禅文化研究所一九八四年、一〇七頁〕)ならびに小川「語録のことは16―揚眉瞬目―」(『傘松』七三〇、大本山永平寺二〇〇四年七月)参照。

②葉山＝葉山惟儼。一二九則に既出。

③我有時教伊揚眉瞬目……「揚眉瞬目」は眉を動かし目を瞬(また)かすこと。「揚眉動目」とも。『楞伽經』卷二・「一切仏語心品之二」(大正一六・四九三頁a/補注②参照)にもとづき、いわゆる作用即性説において、しばしば作用の代表例とされる所作。宗密の『裴休拾遺問』が「洪州宗(＝馬祖禪)」の思想を要約した一段に次のように見える。「洪州の意は、起心動念、彈指動目、所

作所為、皆な是れ仏性なり。……若し其の応用に就かば、即ち挙動運為、一切皆な是れ仏性なり。更に別法の能証所証と為る無し。彼の意は『楞伽經』に准ず、云く、如来藏は是れ善不善の因。遍く能く一切趣生を興造し、苦樂を受けて、因と俱なり。又云く、仏、心を語くを宗と為し、門無きを法門と為す。經に云く、或いは仏利有り、揚眉、動目、笑吹警效、或いは動揺等、皆な是れ仏事なり」(石井修道「真福寺文庫所藏の『裴休拾遺問』の翻刻」『禪学研究』六〇、花園大学一九八一年・八四頁)。ここで馬祖は作用即性に対する肯定と否定を自在につかひこなすという立場を示している。

④ 葉山忽然大悟 〓 「忽然大悟」とするのは本則のみで、諸書は「言下大悟」(『大慧錄』)、「言下頓悟」(『會要』)、「於是省」(『統要集』・『圓悟錄』・大慧『眼藏』)に作る。

《補注①》

『會要』卷一九・葉山惟儼章

問う、「三乘十二分教は、某甲粗ぼ知る。嘗て南方(〓禪宗)は直指人心、見性成仏と聞くも、実に未だ明了ならず。伏して望むらくは和尚の慈悲もて指示せられんことを」。頭(〓石頭)云く、「恁麼も也た不得、恁麼ならざるも也た不得、恁麼も恁麼ならざるも総て不得、汝、作麼生?」師(〓葉山)苴思す。頭云く、「子の因縁、此に在らず。江西馬大師が処に去け。必ずや子の為に説かん」。師、江西に造きて、復た前問を理す。馬大師云く、「我れ有る時は伊をして揚眉瞬目せしめ、有る時は揚眉瞬目せしめず。有る時は揚眉瞬目する者はしく、有る時は揚眉瞬目する者はしからず。」山、言下に於て頓悟し便ち礼を作す。馬大師云く、「子、箇の甚麼の道理を見てか便ち礼拜せる?」師云く、「某甲、石頭に在りし時、蚊子の鉄牛に上るが如きに相似たり」。馬大師云く、「汝、既に如是くなれば、宜しく善く護持せよ」。(統藏一三六・三六九頁d)

《補注②》

『楞伽阿跋多羅寶經』卷二・「一切仏語心品之二」

仏、大慧に告ぐ、「性無くして而も言説を作す。謂く、兔角・亀毛等、世間に言説を現わす。大慧よ、性に非ず非性に非ず、但だ言説のみ。汝の説く所の如き、言説に性有れば一切の性有りとは、汝の論則ち壊る。大慧よ、一切の利土に言説有るには非ず。言説は、是れ作なるのみ。或いは仏利有りて瞻視して法を顕わす。或いは相を作す有り。或いは眉を揚ぐる有り。或いは「眼」睛を動かす有り。或いは笑い或いは欠くびす。或いは警咳し、或いは利土を念じ、或いは動揺す」。(大正一六・四九三頁a / 常盤義伸『楞伽寶經四卷本の研究・漢文』、私家版)

二〇〇三年、九二頁)

常盤『楞伽宝経四卷本の研究・日本文』(梵文からの和訳)

世尊が云われた。大慧よ、存在がなくても言葉は作られます。「兎の角」、「亀の毛髪」、「石女の息子」などについて、世間では話すことが見られます。それらは存在でもなく非存在でもないものとして、話の種になります。大慧よ、君が直前に云ったこと、すなわち、言葉が実際にあるからすべての存在があるというその議論は、消滅しました。どこの仏陀の世界でも言葉が交流の手段として実際に使われているわけではありません。言葉は、あくまで人為的なものです。ある仏土では瞬きせずに見ることで真実が示されます。あるところでは、身振りで、あるところでは、眉をしかめること、ある世界では、両眼を動かすこと、あるところでは、笑いで、あるところでは、欠伸あくびで、あるところでは、咳払いの声で、あるところでは土地を思い出すこと、(E93b)そしてあるところでは、身体を震わすこと、そうします。(一〇九頁)

《補注③》

本則は『正法眼蔵』「有時」巻に引かれる。本書で省かれている傍線部分も引かれており、ここは『眼蔵』の引用が本書とは別種の資料に拠っていることをうかがわせる。

薬山弘道大師、ちなみに無際大師の指示によりて江西大寂禪師に参問す、「三乘十二分教、某甲は、その宗旨をあきらむ。如何是祖師西来意。かくのごとくとふに大寂禪師いはく、「有時教伊揚眉瞬目、有時不教伊揚眉瞬目。有時教伊揚眉瞬目者、有時教伊揚眉瞬目者不是」。薬山き、て大悟し、大寂にまうす、「某甲かつて石頭にありし、蚊子の鉄牛にのぼれるがごとし」。

大寂の道取するところ、余者とおなじからず。眉目は山海なるべし、山海は眉目なるゆゑに。その「教伊揚」は山をみるべし、その「教伊瞬」は海を宗すべし。「是」は「伊」に慣習せり、「伊」は「教」に誘引せらる。「不是」は「不教伊」にあらず、「不是」にあらず、これらともに有時なり。山も時なり、海も時なり。時にあらざれば山海あるべからず、山海の而今に時あらずとすべからず。時もし壞すれば山海も壞す、時もし不壞なれば山海も不壞なり。この道理に、明星出現す、如来出現す、眼睛出現す、拈花出現す。これ時なり。時にあらざれば不恁麼なり。(二・五四頁)

(五二) (金沢文庫本のみ) 石霜擬著即差

石霜山諸禪師示双峰^①（右・信濃本）古禪師云：「擬著即差，是著即乖。不擬不是，亦莫作箇會。除非知有，莫能知之。」
〔書き下し〕

石霜山諸禪師、双峰（右・信濃本）古禪師ニ示して云く、擬著スレバ即チ差フ、是著スレバ即チ乖ク。不擬不是、亦た箇の会ヲ作スコト莫シ。知有二非ザラムヲ除テハ、能ク之ヲ知ルコト莫シ。

〔現代語訳〕

石霜慶諸禪師が双峰古禪師に教へ示した。「あてはめればズれてしまひ、これだとすれば背いてしまふ。だが、あてはめもせず、これだともしない、ということを一箇の見処とすることも相いならぬ。有るを知る。ものにはか、これを知ることとはできぬのだ。」

〔出典〕

〔A〕『伝灯録』卷一二（三七頁／禪文化研究所訓注本四・五一五頁）

〔B〕『会要』卷一〇（続蔵一三六・二九九頁a）

〔注〕

①石霜山諸禪師〓石霜慶諸（八〇七〜八八八）。道吾円智の法嗣。『宋高僧伝』卷一二に立伝され、『伝灯録』卷一五等に語を録す。本則は長い一段からの抜粋。補注参照。

②双峰古禪師〓生没年未詳。前福州双峰和尚の法嗣。『伝灯録』卷一二、『統要集』卷六、『会要』卷一〇に語を録す。右側に添記の「信濃本」とは、真字『三百則』の異本の一つ。金沢文庫本書写時に添記されたもの。一五二則にも見える。他に「イ本」という異本との対校が一六九則に見られる。河村孝道『正法眼蔵の成立史的研究』第二章「真字『正法眼蔵』の書誌学的考察」（春秋社一九八七年）参照。

③擬著即差、是著即乖。不擬不是、亦莫作箇會〓「擬する」は、差し向ける、あてはめる。ソレを何かと同定すれば的はずれとなり、ソレを何かであると判断すれば乖離してしまふ。しかしまた、同定もせず、判断もしない、という考えを立てるものいけない。語は『肇論』〔答劉遺民書〕の「心を擬すれば已に差う、況乃や言あるをや」（大正四五・一五七頁a）をふまえる。一〇六則、「皇曰く、見ハ則便ハチ見、擬思スレバ即チ差ス」。同注①参照。

④「除非知有、莫能知之」 「除非」は下に肯定形の句が続けば「除非のみは」の意となるが、下に否定形が続くと「くを除非きて(そのほか)は」の意となる。白居易「朝帰書寄元八(一)」詩、「除非奉朝謁、此外無別牽(朝謁を奉ずるを除非きて、此の外に別の牽い無し)」(朱金城『白居易集箋校』卷六・三四八頁)。同「感春」詩、「除非一杯酒、何物更関身(一杯の酒を除非きて、何物か更に身に関わらん)」(同卷一八・一九〇頁)。太田辰夫『中国語歴史文法』三四一頁参照。「知有」はソレが有ることを知る。言語化し得ない第一義を、言語化せずそのままに會得する意。三則、「趙州真際大師、南泉に問う、知有底の人、什麼処に向つてか去る。南泉云く、山前の檀越家にて、一頭の水牯牛を作り去る。師云く、師の指示する処に謝す。泉云く、昨夜三更、月、窓に到る」。二九三則、「南泉、衆に示して曰く、三世の諸仏有るを知らず、狸奴白牯却つて有るを知る」。「除非知有、莫能知之」は「知有」の者以外はこのことを知ることはできぬの意で、のちに成句として用いられる。『伝灯録』卷一五・牛頭微章、「師上堂、衆に示して曰く、三世の諸仏、一点の伎倆をも用い得ず。天下の老師、口匾擔の似し。諸人作麼生。大はだ容易ならず。有るを知るを除非きては、能く之を知るもの莫し」(三〇四頁)。『明覚録』卷一、「所以に道わく、三世諸仏、自ら宣ぶること能わず、一代時教、詮注するに及ばず。有るを知るを除非きては、能く之を知るもの莫し」(六頁)。『圓悟心要』上卷・示隆知藏、「巖頭云わく、只だ目前の些子箇の露わること、擊石火、閃電光の如し。若し明らかめ得ざれば、疑著するを用いざれ。此れは是れ向上人の行履の処なり。有るを知るを除非きては、能く之を知ることを莫し」(統藏二二〇・三三三頁)。

《補注》

『伝灯録』卷二・双峰古章

後に石霜に到る。但だ衆に随うのみにして更に參請せず。衆僉古侍者は嘗て双峰の印記を受くと謂い、往往石霜に聞ず。霜、其の悟る所を詰わんと欲するも、未だ其の便を得ず。師、因みに石霜を辞するに、霜、私子を將ち門首に送り出し、召びて曰く、「古侍者!」師、首を回らす。石霜曰く、「擬著せば即ち差い、是著せば即ち乖く。擬せず是とせざるをも亦た箇の會と作す莫かれ。有るを知るを除非きては能く之れを知るもの莫し。好去、好去。」師、「諾、諾」と応え、即ち前み邁く。尋いで双峰の帰寂に属い、師乃ち繼續して住持す。(二三七頁／禅文化研究所訓注本四・五一五頁)

(五二) (152) 大証指石師子

① 慧忠国師、因（西京忠国師、因信濃本）肅宗与師到宮前、乃指石師子云：「陛下、這石師子奇、下取一転語。」帝云：「朕下語不得、請師下語。」師云：「山僧（右・罪）過。」後耽源真応問師云：「皇帝還會麼？」師云：「皇帝会且致、你作麼生会？」

〔書以下し〕

慧忠国師（国師）、因二（右・西京忠国師、因信濃本）肅宗、師与宮ノ前ニ到ル、乃チ石ノ師子ヲ指シテ云ク、「陛下、這ノ石ノ師子奇ナリ、一転語ヲ下（下）取スベシ。」帝云ク、「朕下語スルコト得不（下語不得）、請スラクハ師下語スベシ。」師云ク、「山僧（右・罪）過（罪過）。」後ニ耽源ノ真応、師ニ問フテ云ク、「皇帝還タ会ス麼。」師云ク、「皇帝ノ会ハ且ラク致ク、你ヂ作麼生会。」

〔現代語訳〕

肅宗とともに宮殿の前に着いたとき、慧忠国師は、石獅子を指さして言った、「陛下、この石獅子はたいそう素晴らしゅうございます、ここにひと言おつけ願います。」皇帝、「朕には語がつけられぬ、国師にひと言お願いしたい。」慧忠、「拙僧が悪うございました。」

後に耽源真応が慧忠に問うた、「皇帝は会得されたのでしょうか。」慧忠、「皇帝のことはさておいて、おぬしはこれをどう会得する。」

〔出典〕

〔A〕『統要集』卷二（三四頁a）

〔B〕『会要』卷三（統藏一三六・二四二頁d）

〔注〕

- ① 慧忠国師＝西京光宅寺慧忠国師（？～七七五）。いわゆる南陽慧忠、大証国師はその諡号。六祖慧能の法嗣。『祖堂集』卷三、『伝灯録』卷五等に語を録すが、この則はそれらに見えない。「信濃本」については金沢文庫本五一則注②参照。
- ② 肅宗＝李亨（七一～七六二）。唐朝の第七代皇帝。在位は七五六～七六二年。
- ③ 這石師子奇、下取一転語＝この素晴らしき「石獅子」の本質を、ずばりひと言で言い止めて頂きたい。底本「奇」を『会要』

は「奇特」に作る。「一転語」は、惰性的な既成の語句を打開して、コトの核心を真に言い当てるまっさらな一語。『伝灯録』卷一五・洞山良价章、「師又た曰く、直だ、本来無一物」と道うのみなれば、猶お未だ他(一六祖)の衣鉢を消け得ず。這裏に合に、転語を下し得るべし。且く道え、什麼の語を下し得るや。一上座有り、下語すること九十六転、師意に慚わず。未後の一転、始めて師の意に可う(二九九頁b)。

④ 朕下語不得 動詞の後の「: 不得」は、: することができない。目的語がある場合は、現代漢語とは異なり、「動詞—目的語—不得」の語順になる(太田「祖堂集語法概説」一八〇頁参照)。一一六則、「他ヲ瞞ズルコト一点モ也た得不得(瞞他一点也不得)」。二八二則、「人人這箇を出ることを得不得(人人出這箇不得)」。

⑤ 山僧罪過 〓 私が悪うございました。「罪過」は自ら非を認める語(清・翟灝「通俗編」卷六・政治・罪過条参照)。「伝灯録」卷八・百丈章、「馬祖、一日、師(百丈)に問う、什磨処より来たる。師云く、山後より来たる。祖云く、還た一人に逢著するや。師云く、逢著せず。祖云く、什磨ゆえに逢著せざる。師云く、若し逢著せば、即ち和尚に拳似す。祖云く、什磨処よりか者箇の消息を得来たれる。師云く、某甲の罪過。祖云く、却つて是れ老僧の罪過なり(続蔵一三五・三三八頁b/禅文化研究所「馬祖の語録」一七二頁)。本則では、皇帝は語を下し得なかつたことで、結果的には「石師子」に如何なる分節も加えず、その無相なる本質を損わずにすんだ。はからずも「百事不知、最も好し」(「南泉語要」)、「不知最も親切なり」(「伝灯録」卷二四・法眼章)、となりえたわけである。この「山僧罪過」は自らも一句言うことを避けたものだが、そのころは次の例の「頼いに汝会せざるなり(頼汝不会)」と通じあう。『伝灯録』卷一〇・高亭章、「僧有り夾山自り来たりて礼拜す。師、便ち打つ。僧云く、特に来たりて礼拜するに、師何ぞ打つや。其の僧、再び礼拜す。師、又た打ちて趁す。僧、回りに夾山に拳似す。夾山云く、汝、会するや。僧云く、会せず。夾山云く、頼いに汝会せざるなり。若し会すれば即ち夾山、口、瘞せん」(二六三頁a/禅文化研究所訓注本四・一四九頁)。

⑥ 耽源真底 〓 生没年未詳。慧忠の法嗣。『祖堂集』卷四、『伝灯録』卷一三等に語を録す。

⑦ 皇帝還會 〓 最後に師の方が詫びられたのは、皇帝が会得されたからなのでしようか。

⑧ 皇帝会且致、你作麼生会 〓 「致」は「置」に通ず。『会要』はここを「置」に作る。「く且致(置)」は、「くのこととはひとまらず置いて」。一九二則、「船子八且ラク致ク、作麼生ナランカ是レ心」。皇帝ならそこまで結構だが、汝はそうはまいらぬ、

そこを超えて敢えて一転語を下せ、というところ。

〔五三〕(153) 百靈便戴笠子

百靈和尚、一日路次、見龐公乃問：「昔日南岳得力句、曾拳向人麼？」公云：「曾拳来。」師云：「拳向甚人？」公以手指云：「龐公。」師云：「直是妙徳・空生、也讚之不及。」公却問師：「得力句、(右・是)誰得知？」師便戴笠子而去。公云：「善為道路。」師一去、更不回首。

〔書き下し〕

百靈(百靈)和尚、一日路次ニシテ、龐公ヲ見ル乃チ問フ、「昔日南岳ニシテ力ヲ得シ(得力セシ)句、曾テ人ニ拳向スヤ(麼)。」公云ク、「曾テ拳シ来ル。」師云ク、「甚人ニカ拳向セシ。」公手ヲ以テ自ラ指シテ云ク、「龐公。」師云ク、「直ニ是レ妙徳・空生モ也讚ムル(之)及バ不。」公却ツテ師ニ問フ、「得力ノ句、(右・是レ)誰カ知ルコトヲ得ル。」師便チ笠子ヲ戴テ(而)去ル。公云ク、「善為道路。」師一去シテ、更ニ回首セ不。

〔現代語訳〕

百靈和尚はある日道で龐居士と出会い、そして質問した、「かつて石頭老師から力を恵まれた一句を、これまでに人に示されたこととおありか？」龐蘊、「ありますとも。」百靈、「どなたに示された？」居士は自らを指さして言った、「龐どのに。」百靈、「文殊や須菩提でも、ここを賛嘆しきれまい。」こんどは居士が百靈に問うた、「師が力を恵まれた一句を、どなたがご存じでしょうか？」百靈は即座に笠を被って、立ち去った。居士、「道中お気をつけて。」百靈は行ったきり、振り向きもしなかつた。

〔出典〕

(B) 『伝灯録』巻八・百靈章(二二六頁a／禅文化研究所訓注本三・一九二頁)

『会要』巻五・百靈章(統藏一三六・二六一頁b)

〔注〕

①百靈和尚は生没年未詳。馬祖の法嗣。『伝灯録』巻八、『会要』巻五、『統要集』巻三等に龐居士との問答がわずかに伝わる。

この則については、入矢義高訳注・禅の語録七『龐居士語録』六八頁を参照した。

②路次二道すがら。『伝灯録』巻一六・涌泉景欣章、「彊・徳二禅客有りて到る。路次に師の牛に騎るを見るも、師と識らず」(三二五頁)。

③龐公二龐藴(?一八〇八)。いわゆる龐居士のこと。馬祖の法嗣。馬祖道一や石頭希遷等、多くの禅者との問答が伝えられている。『龐居士語録』の他、『祖堂集』巻一五・『伝灯録』巻八等に語を録す。

④昔日南岳得力句、曾拳向人麼二「南岳」は石頭希遷のこと。『祖堂集』巻四・丹霞天然章、「丹霞和尚は石頭に嗣ぐ、師の諱は天然。少きより儒・墨に親しみ、業は九經に洞ず。初め龐居士と同侶つれだつて京に入り選を求む。…中略…馬祖、便ち機を察して笑いて曰く、汝が師は石頭ならん摩。秀才二丹霞曰く、若し与摩ならば則ち某甲それかが与に石頭を指示せよ。馬祖曰く、這裏より南岳に去くこと七百里。遷長老、石頭に在り。你、那裏かしこに去きて出家せよ」(三五五頁)。「大慧録」巻二に引く本則は「南岳」を「石頭」に作る(大正四七・八二六頁a)。「得力」は助力にあずかる、力を与えられる。龐藴がかつて石頭に参じて、悟ることがあったことをさし、「昔日南岳得力句」で、かつて石頭のもつて得た省悟の内実のことをいう。『伝灯録』では「昔日居士南岳得意語」に作る。「曾て人に拳向する麼」とは、これまでそれを人に話したことがあるかという意だが、その裏に、それを今ここで明示できるかという意を含む。「拳向」の「向」は動詞に後置して動作の帰着さきを示す介詞(…に)。二三八則、「首座乃進前、奪却抛向、一辺(首座乃ち進前し、拄杖を奪却して一辺に抛つ)。二六九則、「折作兩截、擲向階下(竹筥を折つて兩截と作し、階下に擲ち)」。ただしその実義を失つて動詞接尾辞となる場合があり、こゝはその例。一〇一則「説似一物即不中」の「似」に同じ。ちなみに龐居士が石頭のもつて省悟を得たのは、次のような問答であつた。五則、「初め石頭に問う、万法と侶たがひならざる者、是れ什麼人ぞ。頭、手を以て居士の口を掩おほぐ。士、此こゝに於いて豁然と省有り」(『龐居士語録』一二頁参照)。

⑤曾拳来二「来」は過去を回想する語氣(太田「祖堂集語法概説」二二八頁。五五則、「我也曾到洞山来、我れ也た曾て洞山に到り来る)。「二三七則、「汝曾作什麼来(汝曾て什麼を作し来る)」。わが「南岳得力の句」は、とうに検証済みだところ。

⑥公以手自指云、龐公二それは自ら証し、自ら受用するもの。『龐居士語録』、「居士、長髭禅師に到る。上堂に値あひいて、大衆集定す。士、便ち出でて云く、各おの請うらくは自ら檢せば好し」(九五頁)。

⑦直是妙徳空生、也讚之不及。直是：也・亦。は「たとえ：でも也お」の意（太田「祖堂集語法概説」九五頁）。『伝灯録』卷一四・雲巖章、「直是、不佞麼来者亦是児孫（直是い恁麼に來らざる者も亦お是れ児孫なり）」（二八一頁）。『妙徳』は文殊師利、「空生」は須菩提のこと。それぞれ智慧第一、解空第一とされる。「不及」はしきれない、しおおせない。『臨濟録』示衆、「你若し自信不及ならば、即便忙忙地に一切の境に徇つて転じ：」（三三頁）。この一句で、貴公の境地は文殊・須菩提でさえ賛嘆しきれぬ無上のものとなるが、或いは大げさな賛辞で居士の自己完結を揶揄する気分が含まれているかも知れぬ。

⑧得力句、是誰得知。『伝灯録』は「師得力句、是誰知」、「龐居士語録」は「阿師得力句、是誰得知」に作る。では、そういうご自身の悟道の内実を、師はここでいかに私に「挙向」されますか。

⑨師便戴笠子而去。我が「得力の句」も、人さまにお示しするものではない。ただ自ら歩み行くのみだ。

⑩善為道路。旅立つ人を見送る挨拶、道中ご無事で。「途中善為」とも。ここは師の「得力の句」しかと見届けさせて頂きましたというところ。『明覚録』卷一・勘弁、「学士、印を解いて後、師、送りに越州に到る。住すること数日にして乃ち辞す。士、堅く留む。師云く、山に帰り住持するも学士との此の日を忘れず。：中略：師云く、直は千里万里なるも、是に於いて取別せん。士云く、善為道路。師云く、諾、諾」（二二頁a）。

⑪師一去、更不回首。そなたが見届けようが見届けまいが、わしはただ我が道を歩むのみである。

〔五四〕(154) 南泉使得正快

池州南泉山願禪師、一日在山作務、有僧過問師：「南泉路向什麼処去？」師拈起鎌子云：「我這那鎌子三十文錢買得。」僧云：「不問那鎌子三十文錢買。南泉路向什麼処去？」師云：「我如今使得正快。」

（書を下し）

池州南泉山願禪師、一日山ニ在テ作務スルニ（作務）、僧有テ過ギテ（過ギテ、右・過つテ）師ニ問フ、「南泉ノ路什麼ノ処ニ向テカ去ル。」師、鎌（鎌）子ヲ拈起シテ云ク、「我這ノ那鎌子（那鎌子）、三十文錢ヲモテ買得。」僧云ク、「那鎌子三十文錢ニ買ヘルコトヲバ問ハ不、南泉ノ路什麼ノ処ニ向テカ去ル。」師云ク、「我如今使得フニ正ニ快シ。」

（現代語訳）

池州の南泉普願禪師が、ある日、山で草刈り作務をしていると、一人の僧が訪ねてきてこう問うた。「南泉への道はどのように行くのでしょうか。」師は鎌を持ち上げて答えた。「この草刈り鎌は三十文で買ったのだ。」僧、「鎌を三十文で買ったことなどおたずねしておりません。南泉への道はどのように行くのでしょうか。」師、「こうして使うとおると、まことに良う切れるのだ。」

〔出典〕

〔B〕『宏智録』卷三・上堂一三八(二九〇頁)

『会要』卷四(統藏一三六・二四六頁a)

『拈頌集』卷七(高麗四六・一一五頁a)

『会元』卷三(統藏一三八・四七頁b)※『会元』は本書の出典ではありえないが、本則の場合、文字が最も一致する。

〔注〕

①池州南泉山願禪師⇨南泉普願(七四八〜八三四)。馬祖道一の法嗣。『宋高僧伝』卷一一に立伝され、『祖堂集』卷一六、『伝灯録』卷八、『南泉語要』(『古尊宿語録』)等に語を録す。

②南泉路向什麼処去⇨南泉山へと至る道はどちらへ行くのか。道順に言寄せて師の宗旨を問う定型句。一三三則、「僧問フ、台山ノ路、甚ノ処ニ向テカ去ル。婆云ク、驀直去。』『伝灯録』卷二五・投子大同章、「一日、雪峰、師に随つて龍眠庵主を訪ぬ。雪峰問う、龍眠の路、什麼の処に向てか去る」(二九一頁b)。『伝灯録』卷二七・諸方雜拳徴拈代別語、「二僧問うて曰く、徑山の路、何処にか去る。婆曰く、驀直に去れ」(五六七頁a)。

③我這苧鎌子三十文錢買得⇨この草刈鎌は三十文で買ったものだ。今ここでこうして草を刈っておるこの姿の他に「南泉への道」などありはしない。「三十文錢」で買うとは、それが取るに足らぬ、日常の営みの一部であることを表現する。『雲門広録』卷中・室中語要、「師有る時云く、諸方尽く繩墨裏を脱出するも、我が者裏は即ち然らず。僧問う、未審和尚如何ん。師云く、草鞋、三十文にて買う」(大正四七・五五九頁c)。底本では「鎌」の左に「力詹反」と反切が記してある。

④不問苧鎌子三十文錢買⇨僧は自分の問いの高次の意を南泉が理解していないのだと考えて同じ問いを繰り返している。『宏智録』、『会要』は「三十文錢買」の五字無し。『永平広録』卷九は本書と一致する(補注参照)。

⑤我如今使得正快ハわしは現にこの鎌をたいそう鋭く使っている。南泉の禪は今こうして草を刈っている平常底のところにあるというわけだが、鎌自体の物としての価値でなく、その切れ味・はたらきを誇る言い方になっている。平常底は平常底だが、そこにはギリリとしたものが秘められている。それに気づかずにいると、おぬしも一緒に切られてしまうぞ、という凄みを含んだ一句のように思われる。この句は、『宏智録』は「我這鎌子用得快」、「会要」は「我用得最快」、「会元」は「我使得正快」に作り、底本と完全に一致するのは『永平広録』のみ（補注参照）。

〔補注〕

仮字『正法眼藏』中に本則の引用は見られないが、「山水経」巻に東山水上行や本則などを無理会話と解することへの批判が見える。『永平広録』には巻八・巻九に本則が見え、本書の文字と高い一致度を示す。

〔正法眼藏〕「山水経」巻

いま現在大宋国に、杜撰のやから一類あり、いまは群をなせり。小実の撃不能なるところなり。かれらはいはく、「いまの東山水上行話、および南泉の鎌子話のごときは、無理会話なり。その意旨は、もろもろの念慮にかかはれる語話は仏祖の禪話にあらず。無理会話、これ仏祖の語話なり。かるがゆゑに、黄檗の行棒および臨済の拳喝、これら理會およびがたく、念慮にかかはれず、これを朕兆未萌已前の大悟とするなり。先徳の方便、おほく葛藤断句をもちゑるといふは無理会なり」。かくのごとくいふやから、かつていまだ正師をみず、參学眼なし。(二・一八九頁)

〔永平広録〕巻八・法語三

古シ、南泉和尚、山ニ上テ作務ス。僧有テ過問ス、「南泉ノ路、什麼ノ処ニ向テカガル」。泉云ク、「我が這茅鎌子、当ノ時、三十文錢買得」。僧云ク、「你ガ鎌子、幾錢買ラバ問ハ不。吾レ問フ、南泉ノ路、什麼ノ処ニ向テ去ル」。泉云ク、「如今、使得スレバ甚ダ快ナリ」。

南泉、這僧ノ性命ヲ転得スヤ、也未ダシヤ。這僧、未ダ買鎌之旨ヲ會セズ、甚ガ為便チ云フ、三十錢買ヲ問ハ不ト。買鎌ヲ抛捨シテ南泉ノ路ヲ問取ス。若シ、一步ヲ行バ便チ鬼面神頭ト成ラン。這僧ハ且ク置ク。南泉、縦ヒ、買鎌、三十錢之功ニ酬いるコトヲ會ストモ、使得ノ道理、阿誰カ他ニ教シヘン。縦ヒ使得底ハ使底ノ時節ナリトモ、如何快与不快ト了得セン。既ニ使快ヲ會スルコトヲ得、畢竟、半分ハ使ナリ、半分ハ不使ナリ也。其ノ余ノ道理、那一僧道著。(下・二三四頁)

〔永平広録〕巻九・頌古八一

南泉、一日、山ニ在テ作務ス。僧有テ過問ス、「南泉ノ路、什麼ノ処ニ向テカ去ル」。泉、鎌子ヲ拈起シテ云ク、「我が這那鎌子、三十文銭買得」。僧曰ク、「那鎌子、三十文銭買ヲバ問ハ不。南泉ノ路、向什麼処去」。泉云ク、「我レ、如今、使ヒ得テ正ニ快ナリ」。水雲暫到シテ南泉ニ上ル、待嶺頭ヲ不シテ好縁ヲ見ル、草裏ニ風聞ス鎌子話、耳聾天命尚ヲ千年。(下・三五二頁)

〔五五〕(155) 靈雲桃花悟道

福州靈雲志勤禪師、因見桃花悟道、有頌曰：「三十年来尋劍客、幾迴葉落又抽枝。自從一見桃花後、直至如今更不疑。」^① 似瀉山、山云：「從縁入者永不退失、汝善護持。」玄砂聞云：「諦当甚諦当、敢保老兄、猶未徹在。」^②

〔書き下し〕

福州靈雲(靈雲)ノ志勤禪師、因ニ桃花ヲ見テ悟道ス、頌ヲ有レルニ曰ク(有頌スルニ曰ク)、^①「三十年来劍ヲ尋ネシ客、幾迴リカ葉落シ(葉落チ)又タ抽枝スル(枝ヲ抽キツル)。一タビ桃花ヲ見シ自從リ後、直ニ如今ニ至ルマデ更ニ疑ハ不(不疑ナリ)」。瀉山ニ拳似ス、山云ク、「縁從リ入ル者ハ永ク退失セ不(從縁入者永不退失)、汝チ善ク護持スベシ。」玄砂聞テ云ク、「諦当ナルコトハ甚ハダ諦当ナリ(諦当甚諦当)、敢ヘテ保チ(敢保スルニハ)老兄、猶ホ未ダ徹セザルコト(未徹ナルコト)在リ。」

〔現代語訳〕

福州靈雲山の志勤禪師は、桃の花を見て道を悟り、頌を作った。

三十年来 剣を探し求めてきた旅人

木の葉が散り 枝に芽が萌えるのを その間いくたび目にしたことか

だが一たび 満開の桃花を見てより後は

今に至るまで もはや いかなる疑いもない

これを師の瀉山に示したところ、瀉山は言った。「外縁によつて得たものは、いつまで失われることはない。それを大切に保ち続けよ」。後にこれを聞いた玄沙が言った、「いかに大いに当たってはいるが、しかし、敢えて言おう、師兄どのはまだ徹底しておられぬと。」

〈出典〉

(A) 大慧『眼藏』卷上(三二頁a)

(B) 『伝灯録』卷一一(一八三頁b)／禪文化研究所訓注本四・二三三頁

『会要』卷一〇(統藏一三六・二九七頁d)

『統要集』卷五(二〇四頁a)

『拈頌集』卷一五(高麗四六・二四二頁a)

〈注〉

①福州靈雲志勤禪師ニ生没年未詳。瀉山靈祐の法嗣。『祖堂集』卷一九、『伝灯録』卷一一等に語を録す。金沢文庫本四〇則に既出。本則の釈解に当たっては、禪文化研究所訓注本『玄沙広録』(上・七〇頁)を参照した。

②見桃花悟道ニしばしば、香巖撃竹の話と組にして、「見色明心、聞声悟道」の例とされる。『圓悟心要』「示徳文居士、「見か不ずや、古人の投機、江を隔て扇を招き、刹竿を倒却し、指を豎て毛を吹き、桃花を見、撃竹を聞く、皆な是れ契証の処なり」(統藏一二〇・三七四頁d)。

③三十年来尋劍客ニ「三十年来、劍客を尋ぬ」という訓み方もあるが、道忠『虚堂録犁耕』(禪文化研究所影印本・七九頁b)もこれを「劍を尋ねし客」と訓んでいる。『永平広録』卷六がこの偈に和韻して次のように詠んでいることから、道元が「尋劍」の話を『呂氏春秋』一五・察今の「刻舟求劍」の故事と結びつけて解していたことが分かる。上堂四五七、「永平聊カ靈雲禪師ノ韻ヲ続ガン。劍ヲ求メ舟ヲ刻ム胡ト越与、遅遅タル春ノ日幾バクカ枝ヲ尋ヌル。期セ不レ一見桃花ノ処、眼マ綻ビ心穿テ疑イニ足ラ不レ(下・六八頁)。この偈については、入矢義高「詩偈について」(『空花集』思文閣出版一九九二年)を参照。

④幾迴葉落又抽枝ニ秋になると葉が落ち、春になると枝から新しい芽がふき出る。このような光景が何年も続いた。なおこの句を、『祖堂集』卷一〇・玄沙師備章は「葉落幾迴再抽枝」(三七六頁)に、同卷一九・靈雲志勤章は「幾逢花発幾抽枝」(七一四頁)に作る。

⑤瀉山ニ瀉山靈祐。一〇三則注①参照。

⑥從縁入者永不退失、汝善護持ニ「縁より入る」は、文字言句を介してでなく、現実の見聞覚知の機縁に即してということ。

いわゆる「聞声悟道、見色明心」の考え方。

⑦玄砂ニ玄沙師備。一〇九則注①参照。『祖堂集』巻一九・靈雲志勤章では、瀉山に桃花の偈を挙似した後の経緯を次のように記す。「遂に返りて甌閩に錫し、玄沙に拳似す。玄沙云く、諦当なることは甚だ諦当なるも、敢て保せん未だ徹せざることを。僧進みて問う、正に是れなり。和尚還た徹するや。玄沙云く、須らく与摩はにして始めて得し。師云く、古に亘り今に亘る。玄沙云く、甚だ好し、甚だ好し。師云く、諾、諾。玄沙、師に頌を送りて曰く、三十年來只だ常の如し、幾回びの落葉か毫光を放てる。此れ従り一たび云霄の外に去れば、円音の体性、法王に応ず」(七一四頁)。

⑧諦当甚諦当、敢保老兄猶未徹在ニ「諦当」は、びたりと当たる。「甚」で「なことはいかにも」だ、しかし「…」と、後半の句に逆接する。一四六則注⑥参照。「敢保」は、あえて断言する。『祖堂集』巻一〇・長慶慧稜章、「你若し扱得せば、你に這箇の眼有りと許めん。你若し扱し出さずんば、敢えて保せん未だ眼を具せず」と(四〇四頁)。「未」在は、まだくない(一三二則注⑦参照)。

〔補注①〕

本則は『正法眼蔵』「溪声山色」巻に引かれ、道元の拈提が存する。また、「桃花をみて」等として、本則を連想させる句が「仏経」『発菩提心』「優曇華」『転法輪』「自証三昧」『弁道話』など多くの巻に用いられている。

〔溪声山色〕巻

又、靈雲志勤禪師は三十年の弁道なり。あるとき遊山するに、山脚に休息して、はるかに人里を望見す。ときに春なり。桃花のさかりなるをみて、忽然として悟道す。偈をつくりて大瀉に呈するにいはく、

三十年來尋劍客、幾回葉落又抽枝。自從一見桃花後、直至如今更不疑。

大瀉いはく、「從縁入者、永不退失」。すなはち許可するなり。いづれの入者か從縁せざらん、いづれの入者か退失あらん。ひとり勤をいふにあらざらず。つひに大瀉に嗣法す。山色の清淨身にあらざらん、いかでか慙慙ならん。(二一・一一三頁)。

『永平広録』巻九・頌古七二は本則の全文を引用し、巻六・上堂四五七は本則の偈文のみを引用する。

〔永平広録〕巻六・上堂四五七

就中二、春八則ハルチ靈雲桃花ヲ見テ大事ヲ明ラム、秋八則アキチ香巖翠竹ヲ聞テ大事ヲ明ラム。靈雲和尚、一時、桃花洞トニ於テ、豁然ワカゼントシテ大

事ヲ明ム。頌ヲ作ツテ大瀉に呈スルニ曰ク、三十年來尋劍ノ客、幾廻カ葉落チ又タ枝ヲ抽ル。桃花一見自從後、直ニ如今ニ至ツテ更ニ疑ハ不。測リ知りヌ、三十年之弁道ナリトイフコトヲ也、今人須ク其ノ蹤ヲ慕フベシ。(下・六六頁)

『永平広録』 卷九・頌古七一

靈雲因ニ桃花ヲ見テ悟道ス。有頌シテ云ク、三十年來ハ尋劍ノ客ナリ、幾廻カ葉落チ又タ枝ヲ抽ツル、一ビ桃花ヲ見テ自從り後、直ニ如今に至テ更ニ不疑ナリ。瀉山ニ舉似ス。山云ク、從縁入者、永不退失。汝ヲ善ク護持スベシ。玄沙聞イテ云ク、諦当甚諦当、敢保スラクハ老兄未ダ徹セザルコト在リ。二首

古曾誤ツテ桃源に入りシ客、両眼花ヲ看テ一ビ枝ヲ動ス、更ニ歩テ都テ忘ル那畔ノ事、何ヲ將ツテカ酬答イン大家ノ疑イ。

艶陽タル桃李藍朱ノ色、百世春ノ時同ジク本枝ナリ、賤近愚ナラ不バ須ク速キヲ貴フベシ、目を輕シメ耳ヲ重クシテ痴疑スルコト莫レ。(下・三四四頁)

《補注②》

この則について、『林間録』巻下は次のように説く。これによれば、靈雲は桃花を見て何かを得たのではなく、そこに求むべき何ものも存在しないことを納得したのである。玄沙もまた我々にそれを気付かせるためにことさらに平地に波瀾を起こすようなまねを演じて見せたのであつて、その観点からすれば、靈雲が何か格別奇特の事を得たような言い方になっている瀉山の言は、「無大人相(＝大人気ない)」「ふるまいと評さざるを得ない」といふことになる。

古の人、大いなる機智あり、故に能く縁に逢いて即ち宗り、随处に主と作る。巖頭和尚曰く、「汝、但だ綱宗を識らば、本よりは是の法無し」と。予、曾て客と靈雲見桃花の偈を論ず、曰く、「三十年來尋劍客、幾回落葉又抽枝、自從一見桃花後、直至如今更不疑。瀉山老子は大人の相無くして、便ち云く、縁より入る者は永く退失せず」と。独り玄沙のみ曰く、諦当なることは甚だ諦当なり、敢えて保せん老兄は猶お未だ徹せざること有り」と。客、予に問う、「未徹の処安にか在る。」為めに偈を作りて曰く、「靈雲は一たび見て再とは見ず、紅白の枝には花を着けず、耐え固し釣魚船上の客(＝玄沙)、却つて平地に来たりて魚鰕を擲う」。(統藏一四八・三一五頁 a)

《補注③》

「桃花悟道」の話について、『東坡志林』巻二に次の話がある。

世人、古徳の桃花を見て悟道せるを見る者ありて、争いて桃花に頌し、便ち桃花を將つて飯と作す。五十年転た交渉わり没し。正に張長

史の、擔夫の公主と路を争うを見て草書の氣を得たるが如し、長史の書を学ばんと欲して、便ち日び擔夫に就きて之を求めなば、豈に得べけん哉。(中華書局、唐宋史料筆記本、四八頁)

〔五六〕(156) 靈雲驢事馬事

〔頭・慧稜〕^①長慶稜和尚參靈雲。稜問：「如何是仏法大意？」雲曰：「驢事未去，馬事到来。」稜如是往来雪峰・玄砂二十年間，不明此事。一日卷起簾，忽然大悟。乃有頌曰：「也大奇(右・差)，也大奇(右・差)。卷起簾來見天下。有人問我解何宗，拈起弘子劈口打。」峰拳謂玄砂曰：「此子徹去也未可？」砂曰：「此是意識著述。更須勘過始得。」至晚衆僧上來問訊。峰謂稜曰：「備頭陀未肯汝在。汝实有正悟，对衆(右・拳)來。」稜又有頌曰：「万象之中独露身，唯人自肯乃方親。昔時謬向途中覓，今日看来火裏氷(右・冰)。」峰乃顧砂曰：「不可更是意識著述。」

〔書き下し〕

〔頭・慧稜〕長慶稜(長慶稜)和尚靈雲ニ參ズ。稜問ふ、「如何是レ仏法ノ大意。」雲曰く、「驢事未だ去ラザルニ(驢事未去)、馬事到来ス。」稜是ノ如クシテ雪峰・玄砂ニ往来スルコト二十年ノ間ナリ(右・間)(二十年間)、此ノ事ヲ明メ不。一日簾ヲ卷起スルニ、忽然とシテ大悟ス。乃チ頌ヲ有ツテ(アリテ)曰ク、「也大奇(右・差)、也大奇(右・差)。卷起簾來シテ(簾を卷起シ來タリテ)天下ヲ見ル。人有テ我レニ問ハム何ノ宗ヲカ解セルト、弘子ヲ拈起シテ劈口ニ(口ニ劈テテ)打タム。」峰拳シテ玄砂ニ謂フテ曰ク、「此ノ子徹去セリヤ也未可(可ナラ未ヤ)。」砂曰く、「此レハ是レ意識ノ著述ナリ。更ニ須ク勘過(勘過ス)始得すベシ。」至晚ニ衆僧上來シ問訊ス(問訊スルニ)。峰、稜ニ謂テ曰ク、「備頭陀未だ汝ヲ肯ゼザルコト在リ。汝実ニ正悟有リ、衆ニ対シテ(右・拳シ)來タル。」稜又頌ヲ有ツテ曰ク、「万象之中独ル露ルル身(独露身)、唯人自ラ肯ジテ(肯スル)乃方親シ(乃シ方サニ親ナリ)。昔時謬ツテ途中ニ向テ覓ム、今日看来タレバ火ノ裏ノ(火裏ノ)氷(右・冰)ナリ。」峰乃チ砂ヲ顧ミテ曰く、「更ニ是レ意識著述ナル可カラ不。」

〔現代語訳〕

長慶慧稜和尚は靈雲に參じた。慧稜が質問した、「仏法の大意とは何でしようか」。靈雲、「ロバの用事が片づかぬうちに、はや馬の用事がやって来た」。慧稜はこのようにして雪峰と玄砂のもとを行き来すること二十年、いつこうに、此の事“を悟るこ

とができなかった。それがあつた日、簾を巻き上げたひょうしにハタと大悟し、そして頌を作つた、

素晴らしや 素晴らしや

簾を巻き上げたら天下が見えた

人が私に何の宗旨を会得したかと問うたなら

私子を取つて その口めがけて打つてやる

雪峰はこの頌を玄沙に示して言つた、「こやつは極めたであろうか。」玄沙、「いや、これはまだ分別の作り物、さらに点検せねばなりません。」

日が暮れて大衆が挨拶にやつて来た。雪峰は慧稜に言つた、「師備和尚はまだおぬしを認めておらぬ。おぬしは本当に悟つておるので、大衆にそれを示しに参つたのだな。」そこで慧稜はかさねて頌を作る、

あらゆる事物のうちよりただ独り露われる身

それは自ら肯つてはじめて実感されるもの

かつては誤つて路傍に求めていたけれど

いま気づけば 火中に氷を求むる仕業であつた

雪峰はそこで玄沙の方にふりむいて言つた、「これでもう、分別の作り物などとは申せまい。」

〈出典〉

(A) 大慧『眼藏』巻中(七八頁b)

(B) 『公要』巻二四(統藏一三六・四一七頁a)

〈注〉

①長慶稜和尚Ⅱ長慶慧稜(八五四〜九三二)のこと、招慶慧稜とも。「慧稜」は頭注。雪峰義存の法嗣。『宋高僧伝』巻二三に立伝され、『相堂集』巻一〇、『伝灯録』巻一八等に語を録す。入矢義高『雪峰と玄沙』にいわく、「雪峰にはたくさんの弟子がいましたが……この中で玄沙と雲門の二人は、親に似ない、むしろ親以上に突出した、まさに鬼子といつてもいい存在でした。長慶と保福はその反対に非常にまじめな子どもで、雪峰の教えを正直に受け継いだ人です。頭もなかなかいい人たちです」

〔自己と超越〕岩波書店一九八六年・五五頁。以下の注解にあたっては、禪文化研究所訳注本『玄沙広録』巻下・補遺四一「長慶の投機頌二首―意識の著述なり―」(二三五頁)を参照した。

② 靈雲 靈雲志勤。金沢文庫本四〇則・金沢文庫本四三則・一五五則に既出。長慶と靈雲との因縁は、金沢文庫本四三則参照。

③ 稜問、如何是仏法大意：金沢文庫本四三則注②参照。

④ 驢事未去、馬事到来 金沢文庫本四三則注③参照。

⑤ 稜如是往来雪峰・玄砂二十年間、不明此事 本文は本来、「玄砂」の下で断句し、「稜、是の如く雪峰・玄砂を往来し、二十年間、此の事」を明めず」と訓むべきもの。「雪峰」は雪峰義存のこと、一〇九則・一三七則・金沢文庫本四〇則・一四四則・一四九則に既出。「玄砂」は玄沙師備、一〇九則・一一二則・一三一則・一四四則・一四九則に既出。長慶が、雪峰と玄沙の間を往来して道を求めながら機縁かなわなかった話は、『玄沙広録』巻上(続藏一二六・一七七頁b/禪文化研究所訳注本上・二六頁)に詳しい。

⑥ 一日卷起簾、忽然大悟 長慶が大悟する因縁は、『祖堂集』巻一〇に詳しい。補注①参照。ただしそこには、「簾を巻く」話は見えない。大慧『眼藏』は「卷起簾」を「卷簾」に作る。

⑦ 也大奇：「也大奇」は感嘆のことば。底本が本文右に書き込む「也大差」もほぼ同意で、大慧『眼藏』・『会要』はここを「也大差」に作る。一四八則注⑧参照。『玄沙広録』巻下では、この第一頌を「長慶投機頌」として取り上げるが、玄沙はそこでも「我は与麼に道わず」として長慶の頌を肯わず、第四句を「私を拈り將ち来るも打つを要せざれ」と詠みかえている(続藏一二六・一九五頁c/禪文化研究所訳注本下・四二頁)。「劈口打」は口めがけて打つことで、言語化の禁止を意味する。五五則、「僧又た雪峰に問ふ。峰、拄杖を以て劈口に打ちて、云く、我も也た曾て洞山に到り来る」。

⑧ 峰拳謂玄砂曰、此子徹去也未可：大慧『眼藏』は「峰拳謂玄砂曰、此子徹去也。沙云、未可、此是意識著述。更須勘過始得(峰拳して玄沙に謂いて曰く、此の子徹し去れり也。沙云く、未だ可ならず、此れは是れ意識の著述。更に須く勘過して始めて得し)に作るが、底本は、玄沙の語にあつた「未可」を雪峰のことばに移動して「可ナラ未ヤ」と訓み(漢語としては不自然な表現)、雪峰の肯定の語を選択疑問へと変化させている。「意識著述」は、分別意識による表詮。『会要』巻八・香嚴智閑章、「瀉山聞き

得て云く、此の子徹せり也。時に仰山侍立して乃ち云く、此れは是れ心機意識の著述にして成ることを得、慧寂の親自ら勤過するを待ち始めて得し。仰山、後に師に見え問うて云く、和尚、師兄の大事を發明せるを賛嘆す。你、試みに説きて看よ。師、前の頌を挙す。仰云く、此れは是れ宿習の記持にして成る。若し正悟有らば、更に別に説きて看よ（続藏一三六・二八三頁c／大慧「眼蔵」卷中・六一頁b）。因みにこの話と本則はまったく同じ構成をとっている（雪峰―長慶―玄沙」と「湧山―香巖―仰山」の關係がそつくり重なり合っている。補注②参照）。

⑨備頭陀 〓 頭陀を行じる若き日の玄沙に対し、尊重と親しみを込めて雪峰がつけた愛称。『祖堂集』卷一〇・玄沙師備章、「凡そ施為する所、必ず人に先んじ、風霜を憚らず、豈に寒暑に倦まんや。衣は唯だ布納（納）のみにして、道は精專に在り。語黙規有り、時倫に参わらず。雪峰は師の器質粹容を見て、亦た多く相い接し、乃ち師を称んで備頭陀と為す」（三七二頁／禪文化研究所訳注本『玄沙広録』下・一六一頁）。

⑩汝実 〓 正悟、对衆拳来 〓 底本の訓点では「汝実ニ正悟有り、衆ニ対シテ拳シ来タル」と訓むが、原文は「汝実に正悟有らば、衆に対し挙し来れ」と読むべきもの。「拳」は「衆来」の右傍に加筆。

⑪万象之中独露身 〓 本文は通常「万象の中独り身を露す」と読むが、底本は「万象之中独ル露ル身」と付訓する。「独ル」は「独り」の誤写とも考えられるが、観智院本『類聚名義抄』には「独」字に「ヨル」という訓が見える（天理図書館善本叢書〈和書之部〉三三二「類聚名義抄・観智院本・仏」八木書店一九七六年、三九二頁／仏下本六六ウ）。

⑫唯人自肯乃方親 〓 「唯…乃方」は、ただ…のみ、…こそ、…であつて始めて、の意（現代漢語の「只有…才」に当る）。「乃方」は「方」「方乃」に同じ。「しして始めて」。「伝灯録」卷二五・大智道常章、「問う、古人言えること有り、釈迦と我と同参と、未審ず何人にか参ず。師曰く、唯有同参にして方めて知ることを得」（五二二頁a）。『大慧書』答夏運使、「此箇の道理は、唯だ証者にして方めて黙黙と相い契う、俗子の与に言うこと難し」（大正四七・九二九頁c／禪の語録一七・一二五頁）。

⑬火裏氷 〓 火を起して氷を求めるような、見当違いな求め方。「氷」の右傍訓右に朱筆で「氷」字あり。『法苑珠林』卷六九・妖惑乱衆第四、「火を鑽りて水を得ること、豆を種まいて麦を得ること未だ見ず」（大正五三・七〇四頁c）。『摩訶止観』卷四下・第四息諸縁務、「夫れ親に違ひ師を離るるは、本と要道を求むればなり。更に三州に結び、還つて五郡を教くして、意は何に之かんと欲するや。裳を倒さにして領を索め、火を鑽りて水を求むるは、応ずる所に非ざるなり也」（大正四六・四二頁c）。『圓

悟録』卷一五・「法語」中・示會待制、「禪は意想に非ず、道は功勲を絶す。若し意想を以て禪に參ずれば、氷を鑽りて火を求め、地を掘りて天を覓むるが如し。只だ益ます神を勞するのみ」(大正四七・七八三頁c)。

⑭峰乃顧砂曰、不可更是意識著述^レ禪文化研究所訳注本『玄沙広録』では、大慧『眼蔵』を底本として、「峰乃顧砂。(沙)曰、不可、更是意識著述」と断句し、最後のことを玄沙の語とする(『会要』も同様の断句が可能か。「峰顧玄沙。云、不可、也是意識著述(不可、也り是れ意識の著述)」。この解釈に従えば、玄沙は長慶ならびに師の雪峰を一貫して認めていないことになるが、かたや底本では最後のことをばを長慶を肯う雪峰の語とする。道元と同時代の虚堂智愚や万松行秀も、これと同様、最後の語を雪峰のことばとする。『虚堂語録』卷四・立僧納牌普說、「雪峰、玄沙を回顧して云く、者箇又た喚んで註述と作すこと得てん麼」(大正四七・一〇一八頁a)。「請益録』卷上・二〇則保福光境、「峰、沙に謂いて曰く、更に是れ意識の著述とす不可るなり也」(統蔵一一七・四一六頁b)。

《補注①》

『祖堂集』卷一〇・長慶慧稜章

長慶和尚は雪峰に嗣ぐ、福州に在り。師、諱は慧稜、杭州海塩県の人なり。姓は孫、年十三にして出家す。初め雪峰に参見し、学業辛苦せるも多くは靈利を得ず。雪峰是の如き次第を見て、他を断じて云く、「我れ你に死馬医の法を与えん。你還た甘んずるや。」師对えて云く、「師の処分に依らん。」峰云く、「一日に三度・五度と上来することを用いざれ。但だ山裏の燎火底の樹種子の知(如)くに相似て、身心を息却せば、遠ければ則ち十年、中なれば則ち七年、近ければ則ち三年にして必ず来由有るべし。」師は雪峰の処分に依り、兩年半を過得ず。有る一日、心造して、坐し得ず。却つて院外に茶園を遶ること三匝了了つて樹下に坐し、忽底として睡著せり。覺め了つて院に却歸り、東廊下より上り、僧堂に入るや纒や灯籠の火を見て、便ち来由有り。便ち和尚の処に去けり。和尚未だ起きず。…中略…大師云く、「你、又た三更半夜に者裏に来て什摩をか作す。」对えて云く、「某甲別に見処有り。」大師自ら起き来りて門を開き、手を執つて衷情を問う。師、衷情の偈を説いて曰く、

也大差 也大差 簾を巻き上げれば天下に満つ 人有りて我に何の宗を会すやと問はば 扨子を拈起して齧口に打たん
大師便ち安排し了つて、侍者に処分じて伊をして粥を煮せしむ。粥を喫せし後、侍者をして堂裏に第二粥の未だ行ぜざるを見て報ぜしむ。侍者去きて看、来たりて和尚に報ず。和尚、師をして堂裏に来たらしめ、槌を打して云く、「老漢、這裏に在りて住し千七百人を聚得せるも、今日

の下、只だ半个の聖人を得たるのみ。「明朝上堂を索め、昇座して便ち師を喚ぶ。師便ち出で来たる。和尚云く、「昨夜の事、大衆却つて你を疑つて道く、两个の老漢預じめ闍合禪を造す、と。你既に見処有れば、大衆の前に一句語を道得せよ。」師便ち偈有りて曰く、

万像の中独り身を露わす 唯だ人自から肯つて乃めて能く親し 昔日謬つて途中に向て学ぶ 今日看来れば火裏の水(四〇〇頁)

《補注②》

『会要』卷八・香巖智閑章

：乃ち泣きて瀧山を辞す。直に南陽忠国師の遺跡に過り、遂て草庵に憩止す。一日、草木を芟除するに、瓦礫を抛つるに因りて、竹を撃ち声を作し、忽然と省悟す。遽に歸りて沐浴し、瀧山を望みて作礼し嘆じて云く、「和尚が大慈、恩、父母にも踰ぐ。当時、若し我が為に説破せられば、何ぞ今日の事有らん。」乃ち偈を述べて云く、

一撃所知を忘す 更に自ら修治せず 動容に古路を揚げ 悄然の機に墮せず 処処に蹤跡無し 声色外の威儀 諸方の達道者 咸な言う 上上の機と

瀧山聞き得て云く、「此の子徹せり也。」時に仰山侍立して乃ち云く、「此れは是れ心機意識の著述にして成ることを得、慧寂の親自ら勘過するを待ちて始めて得し。」仰山、後に師に見え問うて云く、「和尚、師兄の大事を發明せるを贊嘆す。你、試みに説きて看よ。」師、前の頌を挙す。仰云く、「此れは是れ宿習の記持にして成る。若し正悟有らば、更に別に説き看よ。」師、又た一偈を作りて云く、

去年の貧は未だ是れ貧ならず 今年の貧は始めて是れ貧なり 去年の貧は尚お卓錫の地有り 今年の貧は錫も也た無し 仰云く、「如来禪は、師兄会せるを許めん。祖師禪は、未だ夢にも見ざる在。」師、又た一偈を作りて云く、

我に一機有り 瞬目に伊を視る 若し人会せざれば 別に沙弥と喚べ

仰師、瀧山に報じて云く、「且喜すらくは香巖師兄、祖師禪を会せり也。」(統藏一三六・二八三頁c)

※

担当者

四六―林	四七―池上	四八―小早川	四九―林	五〇―池上
五二―林	五三―池上	五四―小早川	五五―林	五六―池上

※

五一―小早川